

歴史小箱

No.384

石造物は語る〜大場〜

神社やお寺、道端にたたずむ石で造られたもの。それらはいったいどのような経緯で造られたものなのでしょう。

郷土資料館では平成二十八年度からボランティアの皆さんと石造物調査を始めました。今回は大場地区の石造物を見ていきたいと思えます。

大場地区には他の調査済の地区（梅名・安久・中島・多呂・北沢）と比べても多い、百五基もの石造物が確認できました。大場地区内では開田院や光明寺、大場神社など寺社に石造物が集中しています。地藏や観音、狛犬、鳥居などともと寺社にあるものももちろんですが、庚申塔、馬頭観音、道祖神など地区内に散在していたものが集められた、という経緯をもつものも少なくないことがわかりました。

明治初め、大場では現在の

大場駅周辺にいくつかあった寺院やお堂、修験道の家を取りつぶされ、祀られていた仏像などが光明寺や開田院に移されました。加えて、仏教に関わる民間信仰に関するものも排除されました。道祖神や庚申塔、地藏などが地中に埋められたり、首を落とされたりすることが行われています。しかし、それまでは大切に信仰されてきたものだけに現存する寺社に移転することも行われたので、今でも寺社の境内でいろいろな石造物を見ることが出来ます。

こういった動きは、慶応四年（一八六八）三月、明治政府によって出された神仏分離令や修験道禁止令を契機に展開した廃仏毀釈運動の影響により起こったものです。明治初め、地藏などの仏像が撤去もしくは破壊される事例が日本各地において見られます。

大場神社に祀られている道祖神はこの運動によって被害を受けた一体かもしれません。元の頭部は失われてしまい、現在の顔は後の時代に作られたものです。以前は熱海街道と大場駅の

道との分岐点、三つ角となっていたところに祀られていました。しかし、現在は風化が進んできたため、道祖神を新たに作って祀り、もともとあった道祖神が大場神社へ移されたそうです。

また、「秋葉山」の名で親しまれ、庶民の火防の神として広く信仰を集めてきた秋葉大権現も神仏分離・廃仏毀釈運動の対象になりました。秋葉山信仰が神仏習合の信仰であったためです。大場の秋葉山は元々宮川にありましたが、祠は光明寺に、石灯籠は光明寺と大場神社にそれぞれ一基ずつ移され、今も祀られています。

石造物はかつての信仰や歴史を未来へ語り継いでくれています。



▲大場神社の道祖神

三島の歴史を知る

コロナ蔓延と三嶋千句

なべて世の

風をおさめよ

神の春

We pray for the spring of God
To end this terrible wind
All over The world
(英訳：葦山高等学校)

この句は、連歌師飯尾宗祇が文明三年（二四七一）春、三島において東常縁から古今伝授を受けた際、常縁の息子竹一丸が罹った風邪の快癒を立願して詠んだものとされる三嶋千句の発句です。宗祇は、竹一丸が快方に向かうと報賽として千句を三嶋大明神に奉納したとされています（三嶋千句）。また、当時は戦乱の中、病の快方とともに世の中が平和になることの願を込めたとされています。

この願いは、新型コロナウイルス蔓延と医療崩壊が心配される惨禍の中、なす術もなく苦しむ世界の人々の心に届くことでしょう。

この句の願いのように、新型コロナウイルスが一日も早く終息することを願います。

郷土資料館 ☎971・8228